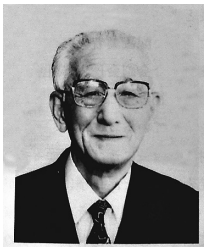
配置薬業界紙「薬日新聞」特集記事より
和製英語「セルフメディケーション」は
昭和20年代後半より配置薬業界から発信された

発行：日本置き薬協会　事務局

配置薬業界紙「薬日新聞」4月27号（春の特集号）は、和製英語「セルフメディケーション」の発案者と提唱者の二人の人物を紹介。その経緯と共に「セルフメディケーション」の生まれた背景と現在の概念とは異なる点について言及している。

発案者は石坂哲夫氏。同氏は業界最盛期の昭和20年代後半から30年代前半にかけて、当時の富山市薬業課開催の配置薬業者講演会の講師を務め、その肩書は東京大学医学部薬学科に置かれた日本薬学会事務局長、その後に常務理事であった。同紙によると石坂氏は「講義、講演の中で、自分が薬局（富山県滑川）の長男として父・九平の自家調剤にも接し、また当時、まだ日本の医療制度は貧弱で、一般庶民のほとんどは病気になっても医者にかかることもなく、ちょっとした身体の変調や症状は売薬を服用して治していた時代に、富山の配置薬こそが日本の簡易医療の実践者だとして、いわば富山の配置薬の売薬さんたちを称賛し、高く評価するために、配置売薬の皆さん相手の講演会で『セルフメディケーション』という言葉をつくり出しそして使用して、配置の売薬さんたちの仕事を称えた」としている。



そして提唱者は故曽我正雄氏。同氏は東京帝大を中退して配置販売業者となり、元全国配置家庭薬業協会長、元富山県薬業連合会長に就かれた。同紙によると曽我氏は「当時、ほかではほとんどセルフメディケーションが口にされてなかった30年以上も前に他に先んじて配置販売業界において率先してセルフメディケーションを唱えた先見性ある人物。薬日新聞に掲載された寄稿文 12 篇を纏めた『21世紀におけるセルフメディケーションのビジョンを求めて』（1989年12月刊）には、膨れ上がる国民医療費負担にあえぐ日本の現状を予見するかのように、『セルフケア（自己養護）とセルフメディケーション（薬による自己治療）なくして医療はなりたたない』と断言している。『セルフメディケーションは専門医療の補完・代替にあらず』として、『遺憾ながらセルフケア並びにセルフメディケーションは、医師のコントロールのもとにおくべきだとの見解が一般的になりつつある』とセルフメディケーションの定義が現在のもののように変質されていきつつあることを危惧し、『セルフメディケーションは、専門医療の補完・代替的機能を持つに過ぎないから、一般的には独立してあるべきではない、というのではあるが、これでは患者の自主性は認められない』とし、『これではプライマリケアは成り立たない』と述べている」。

「薬日新聞」は石坂氏の講演内容や曽我氏の寄稿文を掲載し、60数年に亘りその概念の普及に取組んできたが、本号にセルフメディケーションあるべき姿として、セルフメディケーション推進協議会理事、帝京平成大学薬学部濃沼政美教授（医薬品安全性評価学）の著述の一部を転載している。

「セルフメディケーションとは、常に自分自身を観察して把握する事といえ、健康な生活を心がけつつ、何か小さい乱れであれば、生活や食事の改善で体調を整え、これで修正が効かないようであれば、薬剤師等に相談し、自己治療を行うこととなります。更に、それでも乱れが大きいようであれば、医療機関を受診するなどの判断を自ら行うこと」

「メディケーションを補完する位置でセルフメディケーションがあるのではなく、セルフメディケーションの土台の上にメディケーションがある」

国民医療費の膨張を抑え削減させるには、当初のセルフメディケーションへの回帰が必要である。

本件に関するお問合せ先　**日本置き薬協会 事務局**

〒332-0034　埼玉県川口市並木2－30－6 内外救急薬品内
℡ 080-5514－7511（有馬）　fax 048－251-9657